

JSCP ニュースレター

8

No.08 2016年1月発行 編集・発行・日本コミュニティ心理学会広報委員会

第18回大会を終えて

丹羽郁夫（大会長 法政大学） 萩原豪人（副大会長 法政大学）
平野貴大（事務局長 立教大学）

2015年6月20日・21日に法政大学多摩キャンパスにおいて日本コミュニティ心理学会第18回大会を開催いたしました。キャンパスが東京の外れにあり、開催する棟が抄録集の表紙の写真にしか掲載されていなかったため、ご参加いただいた皆様には大変ご迷惑をおかけしたと思います。それにも関わらず130名をこえる方々にご参加いただけたのは嬉しい限りです。

今年の大会テーマは「コミュニティへの入り方」ですが、この能力に長けた学会員の皆様であったのは幸運でした。実は、キャンパスにはタヌキとイノシシだけでなく、マムシも生息するのですが、これは内緒にしました。いろいろ問題のあるキャンパスなのです。そんなわけで、懇親会では事務局長がカクテルを作り、副大会長に似た大会長が塩漬け卵とチーズの燻製を作成し、二次会で秘蔵の「竹鶴17年」を放出しました。休憩室にネスプレッソも置きました。飲食物でごまかす、いやもてなさせていただきました。

さて本大会では、今後本学会を背負ってゆく若い学会員にお願いし、シンポジウム「コミュニティへの入り方」を開催しました。シンポジストは、荊木まき子先生（大阪教育大学）、上田将史先生（医療法人鉄蕉会亀田総合病院）、大林裕司先生（一般社団法人 心理支援ネットワーク 心PLUS）、コメンテーターは中村菜々子先生（兵庫教育大学）です。学校、病院、企業の3つの異なる機関における心理職の入り方についての具体的なお話を伺うことができました。機関の特徴に応じて関わり方を変えるなどとても実践的な内容になり、これはコミュニティ心理学が今後取り組むべき重要はテーマだと確信しました。2日目は山崎亮先生（studio-L・東北芸術工科大学・京都造形芸術大学）に「コミュニティデザイン-コミュニティの課題をコミュニティの人たちの力で解決する-」のテーマで講演をしていただきました。コミュニティに入る時と去る時の工夫（演出？）の仕方を笑っているうちに学べたのではないのでしょうか。

学会員による発表も充実し、口頭発表では、村本邦子先生の「東日本大震災後の現地支援機関との協働関係構築プロセス～『東日本・家族応援プロジェクト』の4年を振り返って～」、ポスター発表では、小栗貴弘先生の「高校中退リスク評価尺度（RASHD）の開発(1)ー 項目分析および因子分析を用いた項目の選定 ー」が大会賞を受賞されました。

次の大会開催場所ですが、まだ確定していません。東京、地方、東京の流れがありますが、本キャンパスは東京なのか地方なのか分かりませんね。どちらに決まっても暖かく受け入れていただけると嬉しいです。最後に、今回の大会のお手伝いをしてくれたのは法政大学と上智大学の院生（学部生も1人）・修士生43名であったことを報告させていただきます。

役立つキーワード 久野光雄（宮原メンタルクリニック）

ニーズアセスメント

読んで字のごとく、『ニーズ』を『アセスメントすること』である。コミュニティ心理学においては、プログラム評価におけるプロセスの一部分に位置づけられている。プログラムやサービスを、必要としている人々に必要なだけ提供するために、プログラムやサービスの利用者、ステークホルダー（利害関係者）のニーズを把握する手続きである。アセスメントの手法としては、社会指標法、フィールド調査、コミュニティフォーラム、キーインフォーマントへのヒアリングがあげられる。詳細については、安田（2011）を参考のこと。

ところで、ニーズアセスメントにおいてアセスメントの対象となる『ニーズ』とは何か。これがなかなか難しい。心理学界隈では、マズローの欲求段階説が有名であるうし、

臨床場面では、『この方には支援ニーズがある』といった使われ方もする。「もし高校野球の女子マネージャーがドラッカーの『マネジメント』を読んだら」で再評価された経営学者ドラッカーの著書にも、ニーズへの言及がある。

このように、『ニーズ』とは様々な領域で一般的に使われる言葉であり、それだけ浸透している概念なのだが、それゆえ、使用する人物、文脈によって、その言葉の指す意味合いは大きく異なる。ニーズアセスメントをする際は、『どのような概念に基づいたニーズをアセスメントしようとしているのか』についてもきちんとアセスメントをしたい。

安田節之 2011 プログラム評価 対人・コミュニティ援助の質を高めるために 新曜社

第18回大会に参加して ～ 大学院生より ～

法政大学多摩キャンパスという雄大な自然に囲まれた土地での2日間の学会で、私はとても有意義な時間を過ごすことができました。学生スタッフという形で参加させていただいたのですが、大会発表などいくつかの企画を聴講することができ、そのようなご配慮をいただいた企画・運営の先生方に感謝しております。

私が参加させていただいた企画の中で特に印象に残っているのは大会企画である「コミュニティへの入り方」です。医療・産業・学校の分野でご活躍されている先生方が各領域にどのように入り、他の専門職の方とどのように関わっていくのかなどを話されており、とても参考になりました。心理の専門職としてその専門性を活かすためには、そのコミュニティの実情やそのコミュニティに属する人との関係性などをよく知らなければいけないという基本的な視点を改めて実感できた企画でした。

最後になりますが、そのような企画・シンポジウムを運営、提供していただいた先生方に改めて感謝申し上げます。
(法政大学大学院 畠山 成弥)

6月20日・21日に行われた日本コミュニティ心理学会に、私は学生スタッフという形で参加させていただきました。今回、スタッフの仕事の他にも様々な企画に参加することができました。

その中でも特に印象的だった企画は、山崎亮先生による公開講演「コミュニティデザインーコミュニティの課題をコミュニティの人たちの力で解決するー」です。コミュニティに入っていくときに、そのコミュニティの人とどのように関係を作っていくか、そして、そのコミュニティの人たち自身でどう問題を解決していけるかという説明がとてもわかりやすく印象に残っています。福島県での、地域の人との関係づくりのお話もとても勉強になりました。地域づくりをしていくときに、押しつけがましくなく地域に入っていくことが大切ということを改めて考えることができました。

院生の集いや懇親会にも参加させていただき、沢山の先生方や他大学の院生とも交流することができました。2日間の学会で多くのことを吸収でき、とても有意義な時間を過ごせました。このようなご配慮をいただいた先生方に心より感謝申し上げます。(法政大学大学院 栗山 千鶴)

研修委員会 研修参加報告

「コミュニティ心理学の魅力を語るーコミュニティ心理学における実践と研究の融合を目指して」 研修委員会委員 高橋 美保（東京大学）

研修委員会では、平成24年以降、古き良きコミュニティ心理学会の伝統的研修スタイルである宿泊研修の復活を様々な形で試みてきた。第三弾となる平成26年度は、温泉こそないが、逗子にある大正時代の建物を今も大事に使っているKKR逗子松汀園にて1泊2日の宿泊形式で実施された。

今回の研修会は「コミュニティ心理学の魅力を語るーコミュニティ心理学における実践と研究の融合を目指して」と題して開催された。日頃、座学で学ぶコミュニティ心理学に理論的な魅力を感じたとしても、初学者がいきなりコミュニティ心理学をベースとした実践や研究するのは難しい。その本当の魅力を実感するのはむしろ現場に出てからかもしれないが、現場で研究をするのは容易ではない。今回の研修会はこのような実践と研究の解離を埋めることを目的に企画された。

平成27年3月7日（土）8日（日）、19名が逗子に集い、コミュニティ心理学の魅力を熱く語り合った。初日には、大学の国際センターでの実践をベースにコミュニティ心理学的アプローチから研究を行っている東京大学国際センターの大西晶子先生にご登壇いただき、実践をベースにした研究についてお話しいただいた。また、大西先生の実践研究について、日本コミュニティ心理学会会員の吉武清実先生、加賀美常美代先生、丹羽郁夫先生にコミュニティ心理学の魅力を読み解いていただくことで、コミュニティ心理学のアプローチや視点を共有した。2日目には、平成26年度の学会の大会優秀発表賞受賞者である立教大学大学院の高杉葉子先生にご登壇いただき、受賞研究の研究体験について苦労や裏話を交えてお話しいただいた。研究委員会委員の浅井健史先生より総評をいただき、良いコミュニティ心理学とは何かについて議論した。

これらの講演者の発表を通して実践と研究をつなぐ難しさとおもしろさを共有する一方で、若手研究者が自身の研究についてざっくばらんに相談する研究相談会を開催し、4名が各自の研究発表を行った。じっくりと時間をかけて、コミュニティ心理学的な視点からの研究の発展可能性について議論しあった。

研修後に実施したアンケートでは、全般にわたって高評価が得られた。24時間の中で形成された新たなコミュニティが、これからの実践と研究を生むインキュベーションとなれば幸いである。

日 時：平成27年3月7日（土）8日（日）
場 所：神奈川県逗子市 KKR 逗子松汀園
< 7日 >

◎企画①

コミュニティ心理学から読み解く実践講演
「大学内の国際センターをフィールドとした
実践研究」（大西晶子 東京大学）

◎講演を受けて

「コミュニティカフェ実践研究をコミュニティ
心理学から読み解く」

（読み解き人 加賀美常美代先生、
吉武清實先生、 丹羽郁夫先生）

◎研究発表 ①杉浦久美子

②AN Tingting

< 8日 >

◎企画②優れた実践研究の紹介

「第17回コミュニティ心理学会優秀賞発表」
（高杉葉子 立教大学大学院）

◎研究発表 ③金杉泰子 ④柴宮溪太

⑤蛭原 千晶



<参加者より>

●逗子にある隠れ宿で大正時代の香りを思う存分味わいながら、とても充実した二日間を過ごすことができました。

今回の研修会はタイトル通り、まさに「コミュニティ心理学」「実践と研究の融合」がキーワードとなった研修会だったと思います。臨床・教育現場で実践活動に従事しながら研究を進めているということが多くの参加者が共通して持っているテーマだったと思います。数多くの企画から実践現場に身を置きながら、フィールド研究を行う上での難しさ、大変さ、またそのような研究の大切さ、面白さを再確認できました。私自身も実践現場をフィールドに研究を行っていますので、いかにデータを有効に活かすかという点においてとても参考になったと同時に、私自身がとても励まされて、エンパワーされました。

特に、企画の中の実践講演では、大西晶子先生が「大学内の国際センターをフィールドとした実践研究」をテーマにご講演され、その後先生方がコミュニティ心理学の視点から深く読み解いてくださったので、大変興味深かったですし、いつも以上に得られるものが多かったように思います。さらに、懇親会では様々なフィールドで活躍されている若手研究者と交流しながら、情報交換もできましたし、若手研究者同士のつながりもできました。

また、私自身も研究相談会で、「日本語学校における留学生メンタルヘルスサポートシステムの開発-ICTを活かしたシステム構築-」をテーマに計画遂行中の博論研究についてご検討頂きました。通常の研究発表よりも長く、45分のお時間が取れたので、多くの先生方と参加者の方に様々な視点からアドバイスをいただくことができました。（東京大学大学院 AN Tingting）

●今回、博士論文のヒントになればと参加しました。企画研究はどちらも博士論文の発表であり、自分の研究を振り返りながらの参加となりました。1日目の大西先生の発表は、留学生に提供可能な多文化視点での学生相談サービスの探索でした。その中で、自身の実践者と研究者としての視点が一致しないなかで折り合いをつける困難さが研究上の難しさとして挙がっていました。2日目の高杉先生の発表も、カルト宗教というコミュニティに入ること自体が難しいフィールドに対して、丁寧に関係者と信頼関係を作りながら研究活動を進めてこられた姿が印象的でした。

研究相談会でも医療や教育、福祉の現場で人々と向き合い、見えてきたことをことばにしていく過程を拝見することが出来ました。「読み解き人」の先生による「アイロンをかけ”正装させる”のが研究論文である」とのコメントに、現場で感じることをことばに落とす作業に苦心する身にとっては、身に染みるものがありました。自分の実践現場での研究は、同僚や援助対象者となる人々を、新たな切り口や距離感で見直すことにもつながっていくように思えます。研究論文作成の過程では、自分の内にある感覚と向き合い、周囲に還元してゆく作業でもあるとも考えさせられました。（兵庫教育大学連合大学 院 荊木まき子）

編集後記

いつもこのような弁明をしておりますが、私の不手際により、毎度発行が遅くなりましたことをお詫び申し上げます。ニューズレターはその名のとおり新しい情報をお届けすべきなのですが、事実上年報のようになっております。早くより原稿をお寄せ頂いていた先生におかれましては大変申し訳ございませんでした。

さて、前号に直筆のコメントを掲載させて頂きました星野命先生が11月7日2時35分に肺炎のため88歳でご逝去されました。近年は大会でお姿を拝見する機会が少なくなっていました。昨年の立命館大学での第17回大会、そしてその前となりますと、上智大学で開催されました第14回大会の懇親会においてになられたことが思い出されます。

実を申しますと、本学会の前身となりますコミュニティ心理学シンポジウムでは、年に1回、参加者全員が温泉地に宿をともし、全員で同じ発表をきき、夜は「飲コミュニケーション」を深めるという、非常に密度の濃い時間を過ごしておりましたが、もうひとつの特徴として、宿泊の部屋割りがベテランの先生と若手がシャッフルされて同室になるようになっており、私が大学院生時代に初めて参加した山口県の湯田温泉でのシンポジウムでは、星野先生と同室になったのです。それまで書籍でしかお名前を拝見したことのない先生で大変緊張いたしました。夜に部屋に戻ると星野先生はアイマスクを装着し早々にお休みなられ、朝に目覚めた時にはもう床をお出になられていました。何ということのないエピソードなのですが、雲の上のような先生とも非常に近い距離を感じさせて頂けた貴重な機会でした。改めまして心よりご冥福をお祈り申し上げます。

さて、もうひとつ取り上げるべきビッグニュースは、皆さんもご存知の事ではございますが、2015年9月9日に公認心理師法案が可決され、心理職の国家資格が創設されることとなりました。

謹んでご冥福を
お祈り申し上げます。



星野 命 先生

心理援助職に就いている方々にとりましては半世紀にわたる念願が漸く叶った瞬間でありました。10年前の2資格1法案の際にも署名活動などを行いましたが成立ならず、自分の生きている間にはもう国家資格は出来ないのではないかなと思った位でした。それでも2012年には超党派という形で「心理職の国家資格化を推進する議員連盟」が立ち上がり、2014年6月について「公認心理師」法案が提出され、いよいよ成立かと思っていたところが衆議院の解散でまたもや気持ちを碎かれ、我々の期待も上り下がりを繰り返してきたところでしたが、2015年9月の第189回通常国会でようやく可決成立となりました。

このように、国家資格が創設されるにあたり、コミュニティ心理学者たる我々のなすべき役割も益々重要になってくると考えられます。今後も大会での発表や論文投稿など、様々な形でアカデミックな活動が活発となることを願いたいと思います。そして、我々もよりコミュニティ心理学が広がるよう務めてまいりたいと思います。（北翔大学 小坂守孝）

※1頁目ご執筆の丹羽先生に原稿を頂いた時点では2016年度の大会について確定しておりませんでした。2016年6月25日（土）～26日（日）に作新学院大学・作新学院大学女子短期大学部で開催されることとなりました。詳細につきましては学会ホームページ等をご参照下さい。

日本コミュニティ心理学会ニューズレター 第8号
2016年（平成28年）1月31日発行

- ・発行 日本コミュニティ心理学会
- ・編集 日本コミュニティ心理学会広報委員会
(小坂守孝・杉浦久美子・平野貴大・丹羽郁夫)
- ・本学会ホームページURL
<http://jscp1998.jp/>
- ・広報委員会メールアドレス publicity@jscp1998.jp